

おとめ
めい

初恋の
ほつこい
の

調教師と
ちよう
きよう
し

戦乙女



挿絵：萌木雄太
愛枝直

Trainer
Line of Valkgrie

試し読み版



ちょう
きょう
調教師と

はつ
こい
初恋の戦乙女

いんせつおとめ

挿絵・萌木雄太
愛枝直

登場人物紹介

ベルナルド・ロラヴェリテ・アルドレン

(ルナール)

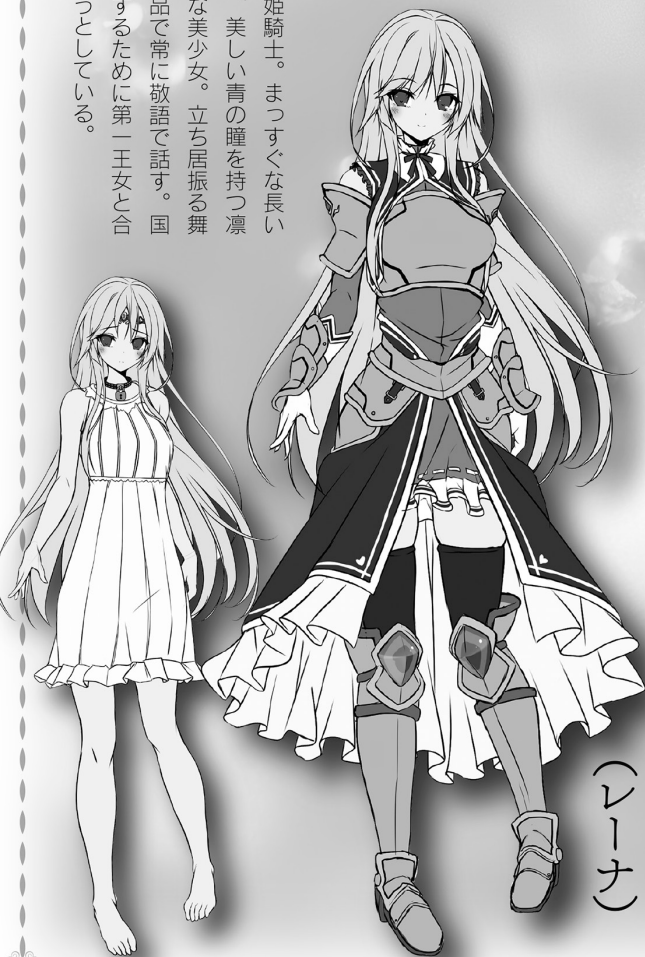


名うての調教師。長身の引き締まった
体躯。ヒロインと同じ金髪碧眼でそれ
なりに整った顔立ち。腕っ節はそこそ
こ。女性経験は当然豊富。

エレオノーラ^{II}ラクラージュ^{II}セルメリア

(レーナ)

亡国の姫騎士。まっすぐな長い金の髪、美しい青の瞳を持つ凛と可憐な美少女。立ち居振る舞いが上品で常に敬語で話す。国を再興するために第一王女と合流しようとしている。



一章	思いがけぬ再会	007
二章	秘めやかな説得	088
三章	賭けの顛末	138
四章	決意	203
五章	さらば愛しき	239
エピローグ		285

第一章 思いがけぬ再会

「ふあああつ、ああっイクうっ♡ おま〇こイクっ、イクううっ♡」

ルナルの腕の中で少女がきゆううつと背筋をたわめ、艶めかしい嬌声を上げる。生白い下腹がうねり、ビクつき、深々と埋めた肉竿に膣壁がきつく絡みつく。

ムスクの立ち籠める薄暗い部屋。中央に置かれたベッドの上で、一組の男女が正常位で交わっていた。

ベッドをくるむ清潔なシーツはくしゃくしゃに乱れ、愛蜜と汗がいくつも水染みをつくっていた。その上には男性器を模した張り型や、卵大の球体を連ねた淫具、あるいは粘質な薬液をたつぷりと詰められたシリンドーなどといった怪しげな道具が散乱している。

板の間張りに白い壁紙。一見なんの変哲もない寝室を見渡せばその手の淫具がそこかしこにあった。大小様々な形状の張り型はもちろん、手枷、口枷、あるいは縄といった各種拘束具。はてには鉄棒と革張りのクッションで組み上げた拘束台まで隅に置かれている。

ここは、少女を組み敷く男——ルナルの調教部屋だった。

引き締まった長身に金の髪。甘く端正な顔立ちの男はかすかに呼吸を上気させながらも、サファイア色の瞳で静かに交接の相手を見下ろしている。

緩く波打つ亜麻色の髪をしたふくよかな少女だった。

血色の良い頬はなお朱に染まり、鳶色の瞳は陶然と目尻が下がっている。たつぷりと量感に恵まれた乳房が荒い息をつく度に大きく上下する様が艶めかしい。

絶頂の余韻に浸るようにふりりと甘やかに震えた少女は、ルナールへにつこりと微笑みかけた。飛び抜けて美しい顔立ちをしている——と、いうわけではない。だが、彼女はそうして笑うと抜群の愛嬌があった。

「はあ……はあ…………。どっちだと、思いますか？」

ルナールは解答に迷って少し黙った。

嬌声の響きも、痙攣の仕方も、膺内の反応さえも、間違えようのないほどはつきりと少女は絶頂したように思える。だが、そんな演技ができるように彼女を躡けたのは他ならぬルナール自身だった。結局考えても考えてもわからず、当てずっぽうで口を開く。

「仕落ちした？」

仕落ちとは、娼婦が客にイカされてしまうことだ。

絶頂すれば体力を使う。客を取るたびに毎回イってしまったては身が持たないから、娼婦はイクふりを覚える必要がある。それも、決してフリだとは悟られない完璧な演技を、だ。ルナールは少女が本当にイってしまったと見立てた。だが、少女は誇らしげにクスクスと笑って首を横に振った。

「せんせ、残念。あたし、がまんできました……♡」

「本当かな？」

ルナールは意地悪く唇の端を吊り上げぐつと腰を押し込んだ。

「ふひあ!! つふあつらめえっ♡ 今そんなにぐにぐにされたら、我慢してたのが……
つううううっ!♡」

膣奥を肉エラで押し揉まれた少女はとたんに余裕をなくして歯を食いしばり、ビクビクと身悶えを繰り返した。膣壁の締まり方が先ほどより強く、長い。彼女は今度こそ本当にイったようだ。つまり——先ほどの絶頂は確かに演技だったらしかった。

「……せんせえのいじわる」

「ごめん、悔しかったから、つい」

ルナールは少女の髪を優しく撫でた。少女はくすぐったそうに目を細めてルナールを見上げる。その瞳には薄い涙の膜が張ってキラキラと輝いていた。

「でも、これで卒業ですね」

「ああ。今までよく頑張ったね。これでもう……」

ルナールは僅かに言葉に詰まった。

「はい。あたし、もう立派な愛奴です♡」

少女は自ら言葉を継いだ。

ルナルはただ頷き、もう一度少女の髪をなぞった。

「それじゃあ最後のおさらいだ。君の人生の目標は？」

「優しくて素敵なお主人様をゲットすること」

「そのために大事な三つのことは？」

「怪我をしない、病気をしない、落ち込んでよくよしない」

「イヤなお客は？」

「にっこり笑顔で上手にあしらう♡」

「これだという男を見つけたら？」

「にっこり笑顔で腕に抱きつく♡」

「完璧だね。幸せが向こうから転がり込んでくるのを自信を持って待てばいい」

ルナルは少女の頬にキスを降らせた。少女は微笑んだまま少し寂しげに目を伏せた。

「……ほんとに、上手にできるかな。せんせ、以外の男の人。怖くないかな？ せんせ、

みたいに、優しくしてくれるかな……？ やっぱりまだ、ちよっぴり……やだ、な」

「……………諦めてやっていくしかないのさ」

張り付く前髪を撫でて剥がし、ルナルは少女の額に優しく手を押し当てた。

「大丈夫さ。いつか慣れる日がやってくる。嵐の海に放り出されて異国の港に流れ着いて

も、人はまたそこで生きていくんだ。嘘だと思ukai？」

「……それって……先生のこと……？」

少女がとろりとした声で尋ねる。まばたきが多くなっていく。ルナールの手のひらから、淡い魔法の光が零れていた。

「諦めてやっついていくしかないんだ。さあ、もうお眠りラバナカーサのお姫様。ノアドラの使いが来るまでしっかり身体を休めておくんのだ」

童女のようにこっくりと頷いた少女は、しばらくして小さな寝息を立て始めた。生白い裸体を毛布でくるみ、ルナールはあどけない寝顔をいつまでも眺め続ける。苦い、後悔の色をサファイア色の瞳に宿して。

「今回もいい仕事だったな。あの娘は将来ウチの看板を張るぜ」

ノアドラが、報酬の詰まった袋をルナールの前にドンと置いた。

持ち上げると袋はずっしり重たい。ルナールは中身を確かめもせず懐へそれをしまった。酒場二階のテラス。夕暮れの港が見渡せる席で、ルナールは厳つい顔をした禿頭の大男——ノアドラと向かい合って食事を摂っていた。

ノアドラはいわゆる女術せげんという奴だ。この港町ラバナカーサで娼館や酒場の経営、女奴

隷の取引をシノギにしている。ルナールは彼のもとに出入りする調教師だった。

「お前もだいたいぶ板についてきたな」

塩焼きにしたカジキのカマへ豪快にかぶりつきながらノアドラが言った。

「まだまだ、師匠ほどじゃないさ」

ルナールは答え、器用にフォークを使ってウミザリガニの蒸し焼きを口に運ぶ。

「当たり前だ。アイツほどの調教師は他にいねえ。全く、断りもなくおつ死にやがって。おかげでこっちはいい迷惑だ」

子供の頃に天涯孤独の身となり、ある一人の調教師に拾われたルナールは、女を躰ける様々な手管を仕込まれ、その死後彼の後釜に座った。ノアドラは先代からの得意客だ。

「つくづくぞつとずとするしかねえや。お前がいなかったらと思うとよ。近頃の調教師ときたら、どいつもこいつも自分の仕事がなんなのかすらわかっちゃいねえんだ。躰けると壊すの区別もつかねえ能なしばかりだ」

ガン、とテーブルを叩くノアドラ。

「その点ルナール、お前は違う。お前の躰けた女はみっちり手管を仕込んであるのに、辛気くさいツラはちつとも見せねえ。気が回るし受け答えもしゃつきりしてるから自然と筋のいい客がつくんだ」

「それが、一番マシだからそうしてるだけさ」

「まあ、ちと女に甘すぎるのが玉に瑕きずだがな」

「そうかもな」

話半分には生返事をかえしながらルナールはじつと海を眺めていた。

波止場では水夫が忙しく働き、オレンジ色に染まる波間を白い帆を揚げた船が行き交っている。潮風は波の匂いと共に海鳥の鳴き声を届けた。

ノアドラの言う能なしと自分は何も変わらない。ルナールはそう思う。

奴隷に堕ちてしまったからには、気のいい金持ちに身請けされるか、働いて、働いて、自由身分を買えるまで勤め上げるかしか人生を全うする手立てはない。そんな現実を受け入れさせる手立てに、ルナールは暴力ではなく甘言を用いる。ただそれだけの違いだ。

結局のところ、元いた場所には帰れない。そこにはなんの違いもなかった。

「……………国が恋しいか」

ノアドラが言った。先代ともつきあいのあるこの男はルナールの生まれを知っていた。

「まさか。大体、恋しくつたつてもう帰る国はないじゃないか」

「違えねえや。くたばれアハトライヒ」

「くたばれアハトライヒ」

掲げられたジョッキにルナールはグラスを合わせた。

揃って杯を干した直後、階下からざわめきが聞こえた。

しばらくしてノアドラのもとへ駆け寄ってきたのは店を預かる番頭だった。

「申し訳ねえ、旦那。例のお客人が……」

「噂をすればなんとやらだ」

ノアドラは不機嫌にため息をつき、のっそりと席を立った。

「悪いな、ルナル。酌をつけるか？」

「俺の躰けた女をか？ 冗談きついで。いいさ、十分タダ飯を堪能したさ」

ルナルも席を立つ。二人は揃って屋内へと向かった。

酒場のホールにはへたくそなピアノの音色と野太い合唱の声と、鈍感さと押し殺した敵意の視線が満ちていた。

「ハッハッハ、どうだ皆盛り上がってきただろう。ほれ、もっと酒をもってこんか！」

叩くように鍵盤を鳴らす軍服の男が、耳障りな甲高い声を上げる。その周囲を同様の格好をした男たちが取り巻いていた。どの顔も真っ赤に染まっていた。

「まるで皇帝気取りだな」

吹き抜けから階下を見下ろしノアドラが鼻を鳴らした。

軍服たちはこの港町ラバナカーサに駐在する外交武官である。彼らのがなり立てているのはアハトライヒの国歌だった。

軍事帝国であるアハトライヒは、この街を治めていた海洋国家マリクを打ち負かし、属国とした。ルナールが師匠のあとを継いで一年ほどあとのことだ。

彼ら以外の客は皆、押し黙って軍服らを睨んでいる。我慢の限界という顔だった。

ノアドラは凝った空気を叩いて割るようにパン、パン、と手を打ち鳴らした。

「ずいぶんとお楽しみなようで、シユトライヒャー少佐」

「おお、ノアドラではないかっ」

階段を降りる大男を、ピアノを叩いていたひよろながい男が立ち上がって出迎えた。

「丁度いい、女を呼べ。ここは水夫ばかりがたむろってむさ苦しくてかなわん」

「ようがす。しかしそれならいつそ河岸を変えちゃあどうで？ きれいだころを揃えた店にご案内いたしやしよう」

「うむ、殊勝な心がけた。よいかノアドラ。酒だ女だの下賤な商いも、ポルタリベラへの船を出させてやるのも、全てはワシが特例として目こぼししてやっておるのだ」

「もちろん心得ておりますとも。言うに及ばずお代は不要。どうぞ一晩なり二晩なり、ゆるりとお楽しみを」

「望むところだ。今日こそはワシの逸物で女どもをメロメロにしてやるぞ」

腹の底に侮蔑を隠してノアドラが揉み手をしていることにも気づかず、シュトライヒャーは下世話な気炎を上げた。

ノアドラのシノギはこの男への賄賂わいろなしには立ち行かない。娼館や酒場を開くにも、奴隷取引のための船を出すにも、アハトライヒの許認可があるからだ。

「異なることをおっしゃる。手前の愛奴どもは、閣下の絶倫ぶりを常々噂しておりますぞ」
「そうかそうか。しかしなあ。どうにもワシには記憶にないのだ。酌をされていい気分で飲んでおるうちにいつも気づけば朝になっておる」

「閣下は酔うて男らしゅうなるタチなのですな」

「なるほど！　しからば奴隷女どものためにもまだまだ酒を飲まねばな」

言つて男はヒックとしゃっくりをした。ルナールは思わず忍び笑いを零した。

どうやら彼女たちは、律儀に教えを守っているらしい。すなわち、『イヤな客は笑顔であしらえ』。ルナールは店を出ようと階段を下りる。

「なんだセルメリア人、お前もいたのか」

目ざとく気づいたシュトライヒャーが、ルナールを呼び止めた。

「……髪と目の色だけですがね」

金の髪に蒼の瞳は、ここマリクからアハトライヒを挟んで北にあったセルメリアの民の特徴だ。そして確かにルナールはセルメリアの生まれだった。

だが、人生の半分以上をこの港町で生きてきたルナールは、セルメリア人と呼ばれてもあまりいい気はしない。それに、当のセルメリアも今となっては――。

「それもそうか。もはやセルメリア人などこの世のどこにもいはししない。みな、我らが帝国の臣民となったのだから」

シウトライヒャーがせせら笑った。

セルメリアがアハトライヒとの戦に敗れたのはほんの半年前のことだった。

マリクと違つて徹底抗戦の道を選んだセルメリアは、属国という形での存続すら許されず、完全に滅んだ。なんとか第一王女だけは同盟国ソレンヌに逃れ、亡命政府を旗揚げしたとの噂だが、もはや何をできるでもないだろう。

だが、ルナールはムキになるでもなく、姿勢を正し、見事な所作で頭を垂れた。

「閣下におかれましては此度のセルメリアの役戦勝の儀、改めて祝しゅうちやく至極に存じます」

シウトライヒャーは鼻白んだように唇を尖らせた。

「なんだ、張り合いのない。お前の生国が滅んだのだぞ？」

「なんせガキの頃の話ですから。この町に流れ着いたのは。ろくに覚えちゃいませんよ。野山の眺めも人の顔もとつくの昔に記憶の彼方さ」

「ほう、それはさぞかし寂しかろう。国許に帰りたいなら通行証を出してやろうか」

「……………シノギの当てが増えるってんならやぶさかじゃありませんがね」

「なんともはや。全く呆れた。薄情な奴だ」

ルナールの態度が気に入らないのか、シュトライヒャーはなおも絡んでくる。

「しかし、シノギと言えば今はかき入れ時だろう？ なにしる愛奴に堕ちたセルメリア女が流れてくるのだ。やはり同郷が相手となれば、逸物にも気合いが入るものか？」

「どうでしょうね。残念ながら、まだ。旦那はこのナリで結構な気遣い屋でして」
「このナリとは言ってくれたな」

ノアドラがこめかみにぐりぐりと拳を押しつける。水夫たちがどつと笑った。

「ふ、ふん。しからばどうする？ もし、そんな仕事が廻ってきたら」

「どうもこうもありやしません。シノギをするだけですよ」

食い下がるシュトライヒャーに再び深々とお辞儀をしてルナールは酒場をあとにする。
絡み酒のシュトライヒャーはなおもブチブチと嫌味を垂れているようだった。

一刻一刻と水平線に近づいていく夕日を眺めながら家路をたどる。

仕事場とはまた別にある粗末な集合住宅にルナールは寝起きしていた。独り身にはそれで十分だった。

酒場でのやりとりが妙に頭にこびりついて離れなかった。

シュトライヒャーに嘯うそいたことはべつに強がりというわけでもない。セルメリアが滅んだとの便りを聞いた時も、正直大した感慨は抱かなかつた。

とつくに諦めはついている。あの時のことも何も後悔はない。そう思うはずなのに——
どうにも上手く言葉にできない何かが胸の奥にわだかまっている。

(いいさ。気にしなれば、気にならなくなる。人間そんな風にできてんだ)
そう自分へと言ひ聞かせて歩く内にねぐらへとたどり着く。

そこには、怪しげな男が三人、壁にもたれかかってルナールを待ち構えていた。

「お前か、調教師のルナールってやつは」

顔を確かめ、頷きあつて、真ん中の男が進み出て尋ねた。

伸びつばなしの黒い髪に無精髭。顔立ちは彫りが深く整っているが、眉間には消えない皺が刻まれ異様なほどに目つきが鋭い。

三人共に傭兵か、盗賊か、あるいはその両方かという粗末な革鎧を着て腰に剣を差している。後ろ二人は長剣だが、声を掛けた男のエモノは柄頭に寶石をはめた短剣だった。

「そういうあんたは？」

「……………ベステイオだ。それで、どうなんだ」

「確かに俺がルナールさ。それで、俺に何か？」

内心の焦りをおくびにも出さずルナールは尋ね返した。

どうにも物騒なことになりそうだった。ベステイオと名乗ったこの男はおそらく魔法の使い手だ。寶石つきの短剣は何も見栄や伊達で持っているワケじゃない。魔法の威力を増幅するための装具なのだ。それも、剣を帯びずにそれ一本で済ませているところを見ると、相当腕前に自信があるらしい。騎士崩れかなにかだろう。

「仕事をやる。ついてこい」

ベステイオが顎をしゃくった。有無を言わさぬ調子だった。

「稼ぎに困っちゃいないんでね。イヤだと言ったら？」

ルナールは懐を叩く。ノアドラにもらった金貨袋がジャラリと重い音を立てた。

ベステイオは無言で短剣を抜いた。柄の寶石が怪しく輝く。無造作に二度短剣を薙ぐと壁に×の字が刻まれた。風の刃だ。事を構えれば打ち合う間もなく首がすっ飛ぶだろう。

どうやら選択肢はないようだ。ルナールは無言で肩をすくめた。

ベステイオが先だつて歩き出す。ルナールはおとなしくそれに従った。残りのごろつき二人が囲むようにその後ろについた。

ずいぶんと歩かされている内に空は紫へと染まっていった。

この街で長いルナールは、薄暗い道を歩く半ばで向かう先がピンと来た。

たどり着いたのは案の定、ある一軒の宿だった。

暑い気候のラバナカーサでは滅多にない石造り。外観は塔のようにひよろ長く、小さな窓には全て鉄格子がはめられている。素性を明かしたくない依頼主が調教師を呼びつけて仕事をさせるのによく使われる店だ。周囲には薄暗がりに紛れるようにして幾人かの男が周りをうろついている。ベステイオの仲間の見張り番だろう。

「ここだ」

ルナールは言われるがままに続いた。

宿の中には人氣がなく、受付さえ出払っていた。完全な貸し切りにしてあるらしい。

おとなしく階段を登る。目的の部屋はすぐにわかった。やはりごろつきが二人見張りについていた。ベステイオの姿を確かめた男らが扉の前から退いた。

ベステイオに続いて入室する。客室はまず応接間があつて、奥が寝室になっている。ベステイオはまっすぐ奥の扉に向かった。入ってきたドアには手下の片方が鍵を掛けた。

「入れ」

ベストイオが手招きした。そこに今から調教を任される女がいるというわけだ。

厄介ごとの臭いがぶんぶんとするが、今更降りると言ってもハイ、そうですかといくわけでもない。ルナルは覚悟を決めて足を入れる。

奥の部屋は調教に使う備品の入った戸棚と椅子や机、そして大きなベッドが置かれただけのシンプルな造りになっている。窓は外から見た通り格子で塞がれている。

ベッドの上に、一人の少女が乗せられていた。枕側の柵に後ろ手で縛られ、膝を崩して座っている。

彼女を見た瞬間、うなじの後れ毛がざわついた。

無言。きゅつと桜色の唇を引き結んでルナルたちを睨みつけている。年の頃は一つ二つ下だろうか、吊り上げた瞳は子犬のように黒目がちで丸く、猛々しいというよりも凛と可憐な印象が強い。その色はサファイアのような蒼で、髪は美しい金。間違はなくセルメリアの女だった。質素な木綿の一枚着と、額を飾るエメラルド付きのサークレットがなんとも言えず不釣り合いだ。首元には鍵付きの細い首輪が掛けられていた。『隷属の首輪』である。貴族出の証だった。

まさか。だがそんな偶然あるわけがない。ただまじまじと少女を見つめる。真っ正面か



ら二人の視線がぶつかった。やがて、睨みつける少女の目が、驚いたようにはっと見開かれた。

「ルウ……………? ルウなのですか?」

掠れて、震える、縊るような声が聞こえた。

瞬間——。

呆れるほどに大きな屋敷。

庭師たちが忙しく働く手入れの行き届いた庭園。

彼らの見守る柔らかな視線。薔薇の木よりも背の低い自分。

そして——走り回るルナルのあとをてこてこついでくる小さな小さな女の子——。

遠い記憶の情景が一拳に脳裏へ押し寄せた。

「知り合いか?」

低い剣呑な声がすぐさまルナルを現実に戻す。

ベストイオだった。男の手はさつそく腰の短剣に掛かっている。ルナールは何食わぬ顔で返事をする。

「よくある手さ。顔見知りだと言いつ張って同情を買おうとするんだ」

「本当にそうか？」

「当たり前だろう。俺に貴族の顔なじみがいるように見えるか？」

「なぜ貴族だとわかる」

「頭に水でも入ってるんじゃないやなきや誰だつてわかるさ。額のサークレットはあんたの短剣と同じ魔装具だ。おおかた魔法の保護が掛かって取り上げられなかったんだろう？ 城が

二つ三つ買える値打ちもんだぜ。平民の手が届くもんか」

「ふん。ずいぶん目端が利くことだ」

「だから、普通だろうよこれぐらい。それともあんた、手下に恵まれないタチか？」

「なんだと貴様！」

配下の一人が気色ばむ。ベストイオはそれを手のひらを向けて制した。

「お前にはこの女を調教してもらおう」

「有無を言わさぬ調子で男は告げる。」

「一突きでいいなりになる色狂いに躡けるとのことだ。純潔は散らして構わない。ただし、ろくに受け答えもできない魔人にされては困る。お前を選んだのはそのためだ」

「報酬は？」

「ディナール金貨五百枚」

さすがにルナールも目を丸くした。一生遊んで暮らせる額だ。なんなら官位が買えたつておかしくない。

「それと、命だな」

ベステイオは短剣の柄を指先で弾く。

注文といい、報酬といい、きな臭いことこの上ない仕事だった。

ルナールはちらりと少女に視線を向ける。少女の瞳は動揺に揺らぎながら自分を見つめている。そうすると、睨みつけていたさつきよりもいつそう幼げな印象が強くなった。

「条件がある」

ルナールは意を決して口を開いた。物理的な切れ味を持ちそうなほどベステイオの視線が鋭さを増した。

「……言うだけ言ってみろ」

「まず一つ。調教の方針は理解した。だが、実際にどうやって躡けていくかは一切口出し無用だ。そしてもう一つ。調教中はこの部屋から出て行ってもらう。手管を人に知られたくねえし、そもそも邪魔だ。要するに、素人はすっこんでろってことだな」

「……」

ベステイオの視線にはつきりと殺意が混じった。

採み手して要求を取り下げたくなるのを堪え、ルナールは騎士崩れの男を見返した。

ベステイオはことさらにゆつくりと歩み寄り、額と額が触れ合うような距離からルナールを睨め付けた。男の背は自分よりも僅かに高く、睨み降ろされるような格好になった。

ベステイオが短剣を抜いた。ルナールの鼻の穴に切っ先が突き込まれた。鋭い刃が凍えるような感触を伝える。少女が息を呑むのがわかった。

「水が詰まってるかい、確かめてみようか？」

冷たさは突如灼けつくような熱へと変わった。ベステイオが鼻先を引つ掻くようにピッとナイフを閃かせたのだ。

さすがに全身の筋肉が硬く強張る。熱はすぐさま強烈な痛みへと変わった。唇を伝った赤いぬかるみが顎に溜まって滴り落ちる。

それでも、ルナールは顔色一つ変えず、平然とベステイオを眺めていた。

「……………行くぞ」

ルナールの袖で汚れた切っ先を拭き、ベステイオが部下に告げた。

「ですが」

「行くぞ」

困惑する部下をよそに部屋を後にする。

残されたチンピラ二人も不快げに一睨みして出て行つた。

ボタンと扉が閉まつたあと、ルナールはしばらく同じ姿勢のままだった。男たちが戻ってくる様子がないことがわかつてようやく、へなへなどへたり込んで鼻頭を押さえた。

「……………クソ、痛つてえ……………！ なんなんだよ全く。クソ、クソっ！」

どっと脂汗が吹き出しカチカチと歯が鳴る。しばらく立ち上がれそうになかった。

「あ……………あの、大丈夫ですか？」

遠慮がちに少女が声を掛けた。ルナールの正体に確信が揺らいでどんな態度をとつていいかわからない。そんな調子だった。

ルナールはこつそりと目元に浮かんだ涙を拭い、じつと少女を睨め付けた。

「お前、こんなところでなにやってんだ。レーナ」

そして、もう呼ぶこともないと覚悟していた懐かしい名前を口にした。

かつてセルメリアに、生まれながら全てを与えられた少年がいた。

名を、ベルナルドⅡラヴェリテⅡアルドレンという。王国に大所領を構えるアルドレン公爵家の嫡男。幼い頃から魔法の天賦を示し、末は三国に名だたる大騎士となるだろうと

目されていた。

少年は七つの春、父親のアルドレン公に連れられ、一軒の別荘に足を運ぶ。

アルドレン公は言った。

今からお前がある一人の少女に会わせる。年は一つ下。お生まれの尊い方だ。

決して粗相のないように。だが、遠ざけることもないように。年近い友人として、兄のように導き、お守りするのだ。お前ならできるな？

承知いたしました、父上、と。利発な少年は父の頼みを請け合った。

そして——少年は一人の少女に出会った。

人形のような少女だった。サラサラと流れる金の髪。まん丸な蒼の瞳。ただそのしろまなこはウサギのように真っ赤だった。

えれおのーら、らくらーじゅ、せるめりあ、です、と。少女は自己紹介を成し遂げるためにたつぷり半日の時間を掛けた。メイドのスカートの裏に隠れ、怯えた様子で少年を伺い、時折意を決して名乗ろうとするのだが、声が詰まって上手くできず、本当にめそめすと泣き出す。そんなことを何度も何度も繰り返す。

少年は父の言いつけを守って彼女が自己紹介を成し遂げるのを根気よく待ち続けた。

少女の名乗った姓がどんな意味を持つかを少年は理解していた。セルメリアはこの国の名前。つまり、彼女はお姫様なのだ。

「やあ……っ」

もはやレーナにできることなど甘えた声でむずがりながらいやいやをすることだけだった。睨みつけることさえ自分から止めてしまったのだから当然だった。

幼なじみは口先だけの嫌がるそぶりさえ甘いキスで塞いでしまう。レーナは知らず知らずのうちにまた彼の舌を出迎えるように自ら舌を絡めてしまう。

（私、なにやってるんだろ……もお、わかんないよお……）

ここから逃げ延びなくちゃいけないのだと。そのためには賭けに勝たなくちゃいけないのだと。頭ではわかっているのに、こうして彼にキスをされて優しく肌をあやされていると、どうしても強い気持ちを保てなくなる。ずつとこうして甘えていたくなってしまう。

ドキドキと早鐘を打つ心臓が。ぞわぞわと震える肌。熱く火照る身体の芯が。苦しかったり、恥ずかしかったり、奇妙な気分がするだけだった自分自身の淫らな変化が、いつしか癖になるような心地よさを伴っていた。

その事実気づいたレーナははつきりと理解してしまう。

これは確かに、調教だつた。

私は今——彼に心と身体を造りかえられているのだ。

「だ……ダメえ……っ」

とたんにこみ上げた強い焦りに、レーナは居ても立っても居られなくなった。息継ぎに

彼がキスを切り上げたつかのまに、甘ったるく掠れた声で訴える。

「なにがダメなの？」

「ダメなの……レーナのこと、ちようきようしちやダメなお……」

だが、幼なじみは口元に笑みを浮かべたままたずらっぽくレーナを睨むと、お尻に添えていた方の手を放し、人差し指でむにゅりと少女の唇をつつく。

「『やれるものならやってみろ』って。そう言ったのはレーナでしょ？」

「だって……だってえっ」

「だってじゃないよ？ 今更そんなわがまま言う子はお仕置きをしなくちゃね」

彼の指が唇を離れて再び脚の方へと伸びていく。

またお尻を触られるのだ。レーナはそう覚悟した。お仕置きだと言うからにはきつとききまでよりずつとエッチな触り方をするつもりには違いない。想像するだけで恐ろしくなつて、だけど同じだけ胸がドキドキして、耐えきれなくなつてぎゅつと目をつぶる。

そつと彼の手が触れた。——またもや、レーナが想像もしていなかった所に。

「ひゃぐうっ!!」

ビリビリと突き刺すような刺激が走り、レーナは閉じたばかりの目を見開いてピクンと身を跳ねさせた。

慌てて下肢に目を向ける。レーナは信じがたい光景を目の当たりにした。

いじわるな調教師の手は、レーナ自身もろくに触れたことのないほどに恥ずかしい部分——つまり——両脚の付け根の秘所へと触れていたのだ。

「や、やああつ！ らめつ、らめなのおつ！ そんなところ触っちゃらめなのおつ」
取り乱したレーナは呂律さえ怪しくなつて、しゃにむに首を振り立てる。

当たり前の話だったがルウが手を放すことはなかった。それどころかゆつくりと、小さく、前後に手のひらを動かして花園を撫でてあやしなながら耳元に唇を寄せる。

「どうして？ レーナはここを触られてなにがダメなの？」

答えられるわけもなくきゅつと唇を嚙むばかりのレーナをルウは容赦なく責め続ける。

脚を、お尻を触った時と同じように、彼の手は羽毛で埃を払うような力加減で秘唇の表面だけを優しくなぞつた。刺激自体はごくごく弱いはずなのになぜかそんな触られ方をすると灼けつくような痺れが腰下を突き抜け、ビクビクとはしたなく全身が震えた。

自然とレーナの両脚はぐうつと力んで持ち上がり、瑞々しく張り詰めた太ももで彼の手を挟みつけてしまう。添えられていただけだった手のひらがきつく股間に食い込んだ。

その瞬間、触れ合った部分からぬぢゅりと湿った音があからさまなほどに響き渡った。

「ふあああつ!! あつ……ああ……つ」

初心な少女の瞳が満月のようにまんまるく見開かれる。それもつかのま、あどけない顔立ちがまた一段と真つ赤に染まる。

「ちっ……ちがうのっ……いまのはちがう……ちがうんです……っ」

レーナは罪悪感にも似た強い羞恥にぷっくりと目尻に涙を浮かべる。自分がいわゆる粗相をしてしまったのだと思っただのだ。

ルウは一瞬だけ不思議そうに眉をひそめ、小さく「ああ」と呟くと、乳房への愛撫を切り上げ目元の涙を親指で拭った。

「大丈夫、お漏らしじゃないよ。何にも怖い事なんてない」

「でもでもっ……うごうっ、私、知りません……っ。こんなの私知りません……っ」

「大丈夫、大丈夫。レーナはちっとも変じゃない。それでいいんだ」

むずがるレーナの頬にキスをして、ルウがまた秘部へと添えた手を動かす。

「これはレーナが気持ちよくなってる証拠。身体が俺を迎える準備をしているんだよ」

そっと小さく円を描いて彼の手のひらが花唇をなぞった。すると、まるで石けんでも塗ったかのように肌と肌がぬるりとすべって、くちゅり、ちゅくりと水音が鳴る。

「ふあっ!? あっ、あああっ！」

とたんレーナはほっそりとした顎をくうっと上向け、甲高く声を跳ね上げさせた。

怪しい痺れが背筋を駆け抜け肌という肌に拡がっていく。瑞々しい肢体がビクビクと艶めかしく打ち震える。

とりわけ円まろやかなお尻ははしたなく波打ちながら、カクカクと一際激しく戦慄おのいた。そ

れだけでも消え入りたいほど恥ずかしいのに、どうしてかレーナの秘密の部分は撫でられたことを悦ぶように、あのぬめり気のある不思議な蜜をまたじゅわりと沸き立たせる。

「ぐ……うぐ……もおやだあ」

レーナはもうどうしていいかわからなくなつて、涙目でスンと鼻を鳴らした。すると彼はしょうがないなと言うように苦笑し、ちゅくりと秘裂から手を離してしまった。

「ふあっ!? あっ……あっあ……っ」

瞬間、思いも寄らない感情が胸に浮かび、レーナは目を見開いて呆然とする。あれだけ怖くて、恥ずかしくて、戸惑いをもたらすばかりだった彼の行為が、とたんに恋しく思えてきたのだ。

「はう……ううっ……」

居たたまれなさのあまりに真っ赤な顔できゅうと俯く。彼はそんなレーナを見てまたクスクスと笑つた。

「大丈夫だよ、レーナ。気持ちよくなるのは恥ずかしいことなんかじゃない」

そう言つたルウは自らの下衣へ指を伸ばし、カチャリとベルトをほどき始めた。

ベルトを緩め、留め金を外していく彼をレーナはおろおろ狼狽えながら、大きな蒼の瞳で盗み見る。幼なじみはそしらぬふりでするりと下履きを引き下ろす。

瞬間、レーナはビクンと震えて息を呑んだ。

——彼の男の器官が露わになって、ピンと勢いよく跳ね上がった。

「見て、レーナ。俺のもこんなになってる」

ルウがその根元に手を添える。レーナはもはや声も出せずに身を竦ませていた。

初めて見る男のものはとても直視できないほどグロテスクな形をしていた。

ひさしの張り出した兜のような先端。幾筋もの血管を浮き立たせるごつごつとした茎部。

根元には二つのクルミがくつついたような肉の袋が垂れ下がって、絶えずうねうねと伸縮を繰り返している。焼けた鉄のように赤黒いその器官は、槍の柄よりも太く逞しく見えた。

「うっ、ううっ、やだやだ、しまつてくださいつ、そんなの今すぐしまつてくださいつ」

レーナはなぜか自分が肌を晒した瞬間よりも強く恥ずかしい気持ちになり、早口になってまくし立てた。

ルウはまるで悪びれる様子もなくクスクスと微笑むばかりだった。それどころか腰の位置を調整してレーナのお尻の真ん前に陣取ると、立てた膝を掴んで容赦なく割り開いた。

「あっ……!!」

驚きの声を上げる少女の、抜けるように白い内ももが露わになった。そして、当然ながら同じく晒された秘裂に——。

ちゅくりと。彼が肉の槍の穂先をあてがった。

「ああ……っ!」

今度の声は少し掠れた。灼けつくような熱が彼の肉先から伝わる。レーナは手先で唇を隠して頼りなく震えながら、触れ合った部分をまじまじと見つめた。

たつぷりと彼の手であやされた牝器は、二枚の肉の畝をかすかに綻ばせて桃色の粘膜を晒し、ぬらりと卑猥に輝きながら物欲しげにヒクついている。

改めて目の当たりにする女の器官は、彼のおちんちんと変わらないほどいやらしく見えた。そこに、ぎらりと凶悪に照り輝くほどパンパンに張り詰めた肉傘の先端が押しつけられた光景は、見ているだけで気絶しそうなほどにふしだらだった。

(……………されちゃうんだ。私、初めてを…………ルウにされちゃうんだ…………)
耐えきれなくなつたレーナはぎゅつときつく目を閉じる。

唇を奪われ、裸にされて、胸やお尻や女の子の大切な所まで触られてもレーナはなんの抵抗もできなかった。ルウは、きつと今度も優しいそぶりだけで強引に事を進めて、破廉恥なことに私を慣れさせてしまうのだ。

レーナはふるふると生まれたての子馬のように震えながら初めての時を待った。

だが——その瞬間は、いつまで経ってもやってこない。彼の逞しいものは、血潮が集まつてじんじんと疼く蜜華を物狂おしいほどの熱さで苛んだまま、じつと動きを止めていた。

「……………?」

今度は何も見えないまま待ち続けるのに耐えきれなくなつておそろおそろ目を開ける。

幼なじみはまっすぐにレーナのことを見つめていた。

「——と、まあ。こうやって女を躡けていくのが俺の仕事だ」

ルウは一転皮肉な調子で嘯いた。

さっきまでの、優しい、だけど有無を言わさない強引な笑顔は嘘のように消えている。代わりに彼の目にはどこか怒っているような真剣な光が宿っていた。

「わかっただろう？ お前が俺の調教に耐えきるのは絶対無理だ。意地を張るなら本当に取り返しのつかないことになっちまうぞ？ 降参しろ、レーナ。そうすれば必要なことだけ教えてやるから」

幼なじみはそう言ったつきり睨みつけるようにして返事を待った。

先ほどとは真逆の胸の痛みが、ずきんとレーナの胸に走った。

ルウは、なにもいじわるでレーナを止めようとしているのではない。今それがはつきりとわかった。胸に走った痛みは、彼の心配に気づかなかったことへの罪悪感だった。

確かに彼の言う通りだ。現にレーナは今の今まで、幼なじみの手管に翻弄されるばかりでなんの抵抗もできなかった。彼がこうしてやめてくれなかったら、きつと為す術もなく流されてしまったらどうだろう。

だが、それでも。たとえそうだとにしても。レーナにはどうしても成さねばならない使命があった。無理だからと諦められない理由があった。

「やあですつ。私、ぜったいぜったい諦めないもんっ」

レーナは、まるで自分自身へと言い聞かせるように叫ぶ。

答えを聞いた幼なじみははぁっつと長く大きなため息をついて、わしゃわしゃと自分の髪を掻き混ぜた。

彼が目を閉じて大きな深呼吸をする。そしてまた目を開けたその時、その顔には例のいじわるな微笑が張り付いていた。

「わかった。レーナは最後までしてほしかったんだね」

「ふえ!! ちっ、ちっちち違います、違います! そんな意味では——」

とんでもない(ついでに言えばきつとわざとの)曲解に慌てふためくレーナを黙らせるように、調教師はぞろりと内もを一撫でする。ひゃつと驚きひるんだ隙に、彼は自らの分身の根元に手を添え、まっすぐにレーナの蜜器へ押しつける。

「恥ずかしがらないでいいんだよ。俺はすごく嬉しいんだから」

「ひゃぐうっ!!」

ぐっと触れ合った部分にかかる重たい圧迫感に、思わず歯を食いしばって息を詰めた。

「レーナ、力んじやダメ。痛くなるよ。力を抜いて」

ルウは無理矢理に押し入ることなく落ち着いた声で呼びかける。

「そんなこと、言われても……無理だよ、無理だよ……!!」

喪失の瞬間のただ中であつて完全に取り乱してしまつたレーナは余計に総身を強張らせてぶんぶんと首を振り立てた。

それでもルウは変わらず笑顔のままだった。局部へと掛ける力は変えないままでぐつと身を乗り出し顔の横に手をつくつと、額へと押しつけるようなキスを降らせる。

「大丈夫、落ち着いて。レーナならできる。絶対にできるよ」
顔を上げた幼なじみが言つた。

その瞬間——レーナの胸に、きゆうつと甘い電流が駆け抜けた。

「大丈夫、信じて。一緒に大きな深呼吸をしよう。俺の真似をして大きく息を吸つて」
ルウはそう呼びかけながらすうーつと大きな深呼吸をする。

あの頃のルウが戻つてきたような気がした。大丈夫だ。レーナならできる。やる前から無理だつて決めつけんな——昔の彼はいつもそう言つて励ましてくれた。

レーナは思わず彼にあわせて大きく大きく息を吸い込む。

「吐いて」
すると今度ははあつと吐息が鼻先をくすぐる。小さかつたあの頃に戻つて素直に彼の真似をする。

「吸つて」
また彼が言う。レーナが真似する。まるで子守歌を聴く赤ん坊のように自然と気持ち

安らいでいく。

「吐いて」

彼が口を大きく開く。吐息を吐き出す。今度はうつとりと甘い調子になった。さわさわと背筋が心地よく痺れ、思わずとろりと目尻が緩んだ。

繰り返す深呼吸へと意識を集中するうちに、全身の強張りはいつの間にかほどけていった。レーナの準備が整うのを辛抱強く待っていた彼のものが、自然にぐつと身の内へ埋まってきたのがはつきりとわかった。

レーナはふいにルウと初めて出会った日のことを思い出した。あの時も彼は、レーナがめそめそ泣くばかりでいつまで経っても自己紹介できないのを、ずっと、ずっと待っていてくれた。

「ルウ……！」

気づけばレーナは彼の名を呼んでいた。何を訴えたくてそうしたのかは、自分にもよくわからなかった。ルウは驚いたように目を見張った。その意味を確かめる暇はなかった。

次の瞬間、彼の腰に僅かに力が籠もった。狭く小さな秘裂の入り口へ、逞しく張り出した肉の傘がぐぷりと嵌まり込む。ピリリと灼けるような痛みが閃く。

「ふぁ!? あうつうつづうううつ……！」

レーナはぐうつと背中を丸め、奥歯を噛み締めくぐもった悲鳴を零す。



レーナはどう言い返せばいいかもわからなくなつて、子供のように幼なじみを罵つた。せめて顔ぐらいは隠したかったが、両手を押さえ込まれてそれもできない。

「うううっやら、やらあ♡ レーナのエッチな顔見たららめなのおっ♡」

溜まらない恥ずかしさにレーナは無理矢理に首をよじつて右の頬を枕に埋める。

だが——童女のかくれんぼよりも拙い抵抗さえ調教師は許さなかつた。

「ダメだよ、顔を隠そうとしちゃ。こつちを見て。俺の目を見つめて」

有無を言わさぬ口調で告げて、ぐつと強く腰を押し出す。

「あぐうううっ!? ひやう……ううっ……ぐ……♡」

膣奥をぐにやりとひしゃげられてビクビクと身悶えたレーナは、彼のいいなりになつて、泣き出しそうに歪んだ瞳を彼へと向け直した。

「うん、いい子だよ、レーナ」

引き締まつた体躯で覆い被さり、容赦なく抽送を繰り返しながら、ルウは優しく落ち着いて光をサファイア色の瞳に湛えてじつとレーナを見下ろしていた。

「ひづっ! うううづうっ……っうああんらめっ♡ らめらめえっ! 許して♡ 許して♡ おかしくなっちゃうっ♡」

ぬぢ、ぐぢ、と蜜濡れた媚肉を扶られ続け、あられもなくビクビクと戦慄きながら、レーナは絶るように彼を見上げて必死の懇願を繰り返す。

——なにか、得体の知れないものがお腹の奥から溢れて噴き上がろうとしている。今までは比べものにならない快樂の大波がもう間近にまで迫ってきている。生まれて初めて感じる自分の身体の淫らな変化に酷く怯えて取り乱す。

「おかしくなる？　もしかしてレーナ、イキそうになってる？」

ルウはいじわるな腰使いも優しい笑顔もまるで変えることのないままレーナに尋ねた。

「イキそう？　そんなの知らない……わたひ、どおなっちゃうの……？」

「イク、っていうのは女の子が一番気持ちよくなる瞬間のことだよ。身体中がビクビクして、エッチな声が止まらなくなつて、おま○この中がきゅうつて締まつて頭の中が真っ白になるんだ。初めてのエッチでイけるなんてレーナは偉いね」

レーナは、頭が朦朧としてその説明をうまく理解できず、しばらくの間ぼかんとしていた。だが、くちゆくちゆと蜜音を鳴らして秘裂を掻き乱す感触に身を委ねながら、そんな反応をする自分自身を想像しているうちに、だんだんと実感がこみ上げてきた。

「……………それって、恥ずかしい…………？」

「そうだね。気持ちよすぎでお漏らししちゃう女の子もいるね」

「お漏らし…………!!　やだぁ♡　そんなのしたくないよおっ♡」

レーナは彼の視線から逃れようとぶんぶんと首を振り立てて悶え廻る。汗に濡れた金糸の髪が妖しく波打ちシーツに散らばり、ほっそりとした肩が清艶にくねる。

恥ずかしさのあまり余計に痴態を晒すレーナを調教師は楽しんで叱った。

「目を逸らしちゃダメ。おま○こ気持ちよくっておかしくなる顔、全部見せて？」

レーナはなぜかその声にきゅうと胸が疼いて彼の言葉に逆らえなくなった。

「はひっ……ひっ……ひっ……ひっ♡ ……ふあっ♡ はひっ……はひっ♡」

はしたなく上気した吐息を繰り返しながらじつと彼の瞳を見つめ返す。

余すことなく彼が見ている。汗まみれで、赤く火照って、快樂でくしゃくしゃに歪んだ顔を。彼のものがずんと奥を突き上げるたび、たゆたゆと乳房が波打つさまを。

そう強く意識するほど燃え上がるような羞恥が心を灼いて、レーナを異常な興奮へと導いていく。気の遠くなるような快美のざわめきが全身を震わせ、きゅうつと切なく下腹が力み、どろどろに濡れそぼつ蜜壺が断続的に引き締まって雄竿に絡みつく。

「もおらめえ……っ♡ らめなの……もおらめなのお……っ♡」

はつきりと限界を悟ったレーナは上擦る声で訴えながらふるふるとかぶりを振った。

もはや眼差しは彼の目に吸い付いたまま剥がれない。まさに愛奴そのものの従順さで幼なじみをじつと見つめる。

そんなレーナを褒めるように、彼はちゅつと優しいキスを唇に送った。

そして——腰使いに手加減を加えるどころか、これまでずっと同じペースを保っていた穏やかな抽送を、ほんの僅か、でも確実に力強く速めた。

「もうイキそうなんだね。イってごらん？ イクときはちゃんと『おま〇こイキます』って言うんだよ？」

「やりやあつ♡ ゆりゆして♡ ゆりゆしてえっ♡」

「大丈夫、怖くない。俺が見てあげてるから。とびきり可愛らしくイッてごらん、レーナ」
ちゅぶちゅぶと眩暈のするような水音と共に秘裂を掻き乱されながら、レーナは幼かった日のことを思い出した。高い木の枝の上から大丈夫だ、頑張れレーナと手招きをする少年の顔が、今の彼の顔に重なった。

「もおらめっ……らめえっ♡ ふあっあああっ♡ ふやあああっあああああっ!!」

瞬間——煮えたぎるような快美の痺れがおへその下で一挙に沸き立ち、レーナは総身をガクビクと痙攣させて艶めく絶叫を迸らせた。

気持ちいい——ただそれだけが純粹に全身を包み込んで頭の中が真っ白に染まる。目の前の彼の顔さえ滲んで歪んで自分が今どこに居るのかさえ何もわからなくなっていく。

「ふあっ♡ あああっ♡ ああああっ♡ ふやあああああっ!!」

ただ一つはつきりとしているのは自分が、イったことだけだった。彼の言っていた通りのことが自分の身体に起こっていた。

イク前はビクン。ビクン。と、気持ちよさを堪えかねて断続的に引き付けていたレーナの腰は、ガクガクビクビクとまるで壊れたオモチャのように激しく前後に揺すられている。

力の入らないはずの両脚がなぜかぐつと持ち上がった彼の腰を押さえ込むようにぎゅうつときつく絡みつく。

その律動にギチギチときつく窄まる蜜裂が啞え込んだ彼のものと激しく擦れてまた下腹が甘い痺れに苛まれる。終わりがないのかと怖くなるほどいつまでも長引く強烈な媚悦に、レーナはだらしなく半開きにした唇からいつまでも淫らな悲鳴を上げ続ける。

涙どころか涎まで垂らして生まれて初めての絶頂に喘ぎ悶えるレーナのどろどろに蕩けきったよがり顔を、ルウは変わらぬ笑顔でじつと眺めていた。その視線にまた強烈な羞恥と裏腹の興奮がぶり返し、レーナは胸郭をギクンギクンと突き上げて乳肌をたゆたわせながらまた痙攣を繰り返す。

(気持ちいいよう……!! こんな気持ちよすぎておかしくなっちゃう……!!)
頭も心も快楽でいっぱいになり満たされたレーナは為す術もなくイキ狂い続ける。

「ダメじゃないか、レーナ。何も言わずにイッたりしたら」

だが——調教師はまるで追い打ちのように優しく叱ってぐつと下腹に力を込めた。

「ふやあつ?!」

レーナはなにが起こったのかわからなかった。蜜壺へぐつぷりと埋まった肉の槍が、その穂先で最奥をぐつと押し込み深々と食い込んだ。

ビクンっ——と、彼のものが遅しく脈打つのを、敏感になった膣壁がはつきりと捉えた。

そして、直後――。

びゅくうつ、どぶうつ――と。マグマのような熱の塊がレーナの中へと注ぎ込まれた。

「ふやあああああ……っ!? にゃにこれ……にゃにこれえ……っ♡」

どろどろに煮えたぎる快樂そのものが下腹を溶け崩していくような感覚に、レーナは茫然としてぶるぶるとよがり震えた。トドメのようなだめ押し痴悦に、ただでさえ快樂に狂っていた肢体が残る体力全てを振り絞るようにきつく強張る。

彼のものはビクンビクンと何度も脈動を繰り返しながら熱い蜜液をドクドクと吐き出す。極限の快美、身の内を満たす温かさに恍惚と喘ぎ狂っているうちに、レーナはふいに彼の性器が吐き出すものの正体に気づいた。

(私……ルウにッしゃせいッされてるんだ……赤ちゃんの元を出されてるんだ……)

心の中でそう呟いた瞬間、お腹いっぱい満たしていた熱がまるで転移の魔法を掛けられたみたいに頭へとうつつってレーナの意識を灼き尽くす。

「ふやああ、らめなのお♡ あかちゃんできちやううっ♡」

叫んだ声は自分自身でも呆れるぐらい嬉しげに甘く上擦っていた。幼なじみは当然のように構わず子種を吐き出し続ける。その容赦のなさにレーナの意識は余計にふつつと煮えて泡立った。まるで悦びそのものが溢れるように、卑猥にヒクつき彼のものを食いしめる牝器の上端から、透明な蜜汁がぶぢやりと零れた。



怪我の治癒や肌の浄化、果てには避妊にいたるまで様々な魔法が使えるようになる。ごくごく短い時間ではあるが、その気になれば得意だという闘気法も使えるだろう。

だが——レーナはこの間自分で言っていた通り、絶望的に魔法がヘタだった。思わずルナールもそりや家庭教師みんな匙を投げるわと密かに呆れてしまったほどである。

「ううっ……がんばる………んくくっ」

今も彼女は子宮に注いだ精液から魔力を得ようとしているが、成功する兆しはまるでない。ぎゅつと目を閉じて力んでも膣肉が雄竿に絡むだけなのだから当たり前の話だった。

「可愛いけど、違うよレーナ。おま○こを締めるんじゃないくて、術式を強くイメージしておへその下に描くんのだ。目をつぶっっちゃダメでしょ？」

「うううっ、だつて♡ だつてえ♡」

そうして彼女が甘えた声でむずがっている内にまた、おかわりの時間がやってくる。人の体液からはいつまでも魔力が抽出できるわけではなかった。

「ほら、もう一回膣内に射精すよ」

「いっ、いやっ♡ まつて、まつてえっ♡ 今射精されたら……っ」

「いっちゃいそう？ でもこの魔法はいつてる最中でも使えなきゃいけないからね」

ルナールはそう告げ、容赦なくびゅぐびゅぐと子種を注ぐ。

「ひあああっ♡ 精液なかにびゅーつてでてるよおっ♡ イクううっ♡ レーナおま○こ

「イっちゃうのおっ♡」

幼なじみは、魔法を使うどころか躡けた通りの淫らかな言葉を可憐な声でまくし立てながら、華奢な肢体をビクビクと震わせて絶頂に達してしまった。

「はっ……ふあっ……ひっ……はひっ♡」

荒い呼吸を繰り返して、きゅんきゅんと嬉しげに姫壺を窄ませたあげく、彼女はふいにくteriとシートに身を投げ出してそのまま気を失ってしまう。

「……………おい、レーナ？」

呼びかけても返事はない。

どうやら避妊の魔法は今度もルナールが使わなくてはならないようだった。

調教を終え日も落ちた頃、ルナールは自宅を出てバザールへと足を伸ばした。

今日も背後に人の気配があつた。ベステイオは監視を付けることにしたらしい。

どういふ心変わりがあつたのかはわからないが、いづれにせよこらバナカーサでよそ者がルナールを尾行し続けられるわけもない。二、三角を折れてなじみの店を突っ切らせてもらおうと、追っ手は簡単に振り切れた。

更にいくつかの店に裏口を借り、狭い路地と渡り廊下をくぐり抜け、ルナールが向かったのは一軒の酒場だった。

麝香の煙が立ち籠める店内は無数の絨毯で迷路のようにしきられており、酷く薄暗かった。そこかしこから男女の睦み合う声と音が聞こえる。

ルナールは絨毯の文様を頼りに奥へと進んでいく。やがてたどり着いた小部屋には、一人の男が待っていた。

「待たせたな、ウガルデ」

ウガルデと呼ばれた男は水タバコのパイプから口を離し、煙を吐き出しながらゆつたりと頷いた。ルナールは彼の真正面に座る。差し出されたパイプの吸い口をルナールは手で制して断った。

「かまわんさ。それより手配は済んだか？」ウガルデが聞く。

「ああ、目録を用意してある。紹介状も書いておいたから間違いなく書いた通りの値で売れるはずだ」

ルナールはそう言って蜜蝋で封をした証書を渡す。

「手付けは」

「確かめてくれ」

ウガルデは、ルナールが差し出した袋の口を開けて中を確かめ、また頷いた。

「ディナール金貨五十枚、確かに受け取った。ずいぶんと溜め込んでいたな、ルナール」

「使うアテがなかったもんでね」

「よかったじゃねえか。有意義な使い道が見つかった」

金貨袋から顔を上げぬままウガルデはニヤリと笑った。

このラバナカーサからポルタリベラへと向かう船は、ノアドラの貿易船しかない。

ノアドラは密航には手を貸さない。そんな真似をすれば湯水のように袖の下を振る舞って得た交易権が泡と消える。アハトライヒの大使館が発行する乗船許可証があるなら特例として船に乗れるが、そんなものはどうあがいても手に入りっこない。

となれば、どうしてもこの街を出たいというなら、残る手は密航だけだ。コネがなくて信用できる船を見つけれないし、たとえアテがあったとしても相応以上の金が必要になるが、幸いルナールにはそのどちらもがなんとか工面できた。

「船が決まり次第また人を寄こす。誰にも話すなよ」

「当たり前だ。そんなへまするもんか」

念を押す密航師にルナールは笑って答えた。

まだ、このことはレーナには話していない。ルナールは事を起こす直前までなにかもを秘密裏に進めるつもりでいた。

レーナを逃がす決意は固めた。そのための手配も始めた。

だが、それとは別にルナールは彼女への調教も続けていた。

「んううっ……っふあっ♡ あっ、ひあっ、あっああ、ツン♡」

可憐な声をなおさらに愛らしく上擦らせて、レーナは切れ切れに喘ぎを零す。

姫君はルナールの腰の上に馬乗りになり、秘裂に雄竿を咥え込んだままじっと動きを止めている。時折酷くじれったそうに腰をくねらせかけるが、息を詰めてそれを耐える。

「辛そうだね。思い切り腰を振ってイキたい？」

ルナールの問いかけに、レーナは耳まで顔を赤くしながらこくと頷く。

「正直にお返事できて偉いね、レーナ。でもダメだよ。腰を振るのも、くねらせるのも、おま○こをわざと締め付けるのも禁止。ナカに入ってる感触だけでイクんだ」

ベッドに寝そべるルナールはにこやかに微笑んだまま意地悪く彼女に言いつける。

「はううっ……どうして、ですか、ルウ——ルナール。んううっ♡ イクふりを覚えるのに、どうしてこんなイキかたを、覚えなくちゃ……っ♡」

レーナは半ばで声を詰まらせ、唇を噛んで小さく震えた。ツンと上向いた桜色の乳首がその振動にふるりと揺れた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

魔界転生
ジェノバ

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルとかわれない
ドキドキクラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



女刑事美優

美優は自らの身体から

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

リアルドリーム文庫



あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!!



異世界で
手に入る
魔法の力

ドキドキクラブな
ハーレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫